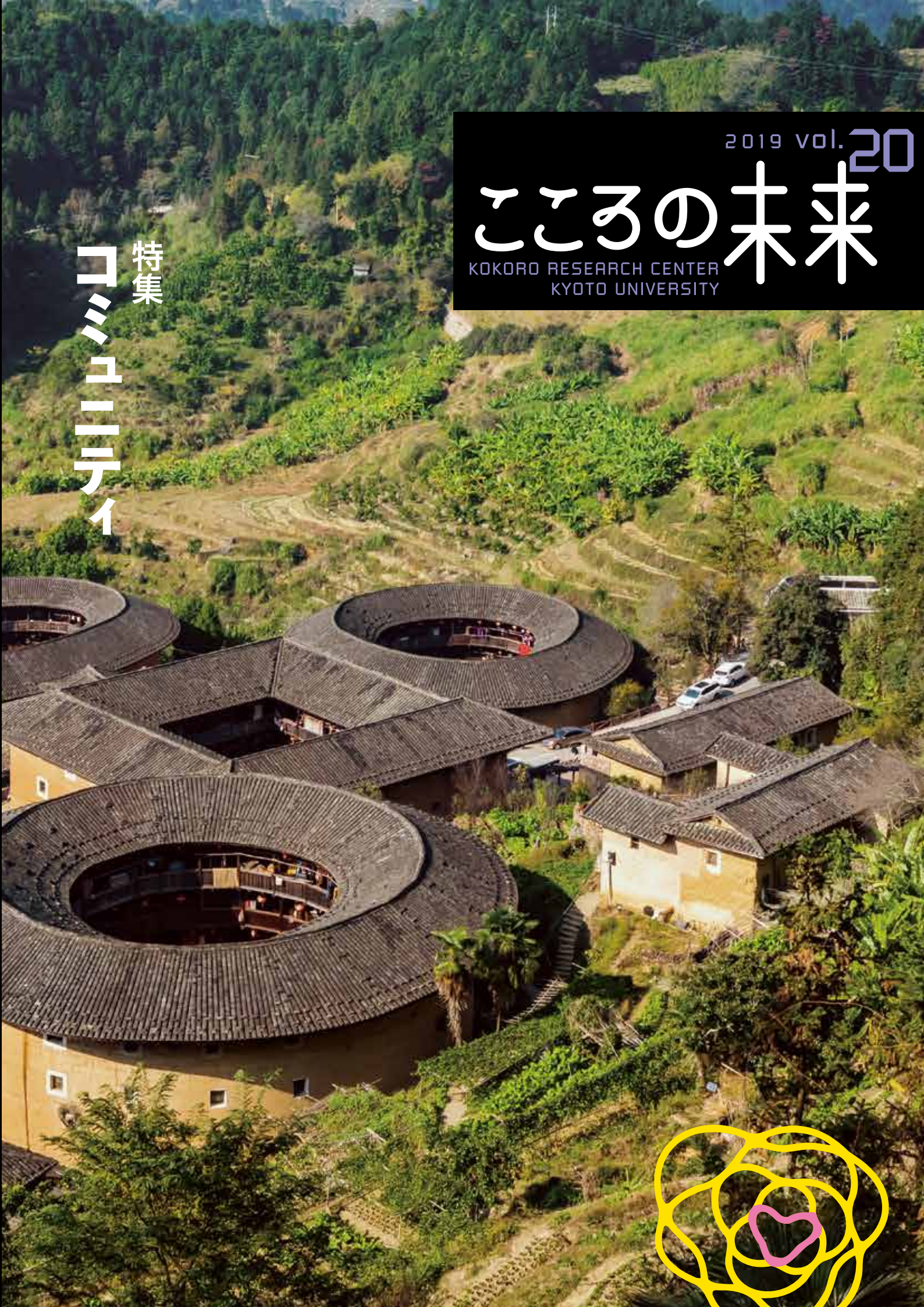


2019 vol. 20

こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

特集
コミュニティ



ごあいさつ

本号の特集テーマは「コミュニティ」で、これは当センターの3領域のうちの「こころときずな」に関係している。こころが個人のものとして捉えられがちなのに対して、おもしろい切り口であるし、2017年の国際京都こころ会議の「こころと共生」を受けているとも言えよう。わたしの専門である心理療法は、アンチコミュニティ的なところがある。前近代には共同体で行われてきた癒しの儀式を、個人の治療契約に変え、秘密保持を強調する。ところが個人に焦点を当てた心理療法を行っても、本人の変化とともに家族が変化したり、周囲の人間関係が変化したりする。さらにユングは、個人を超えた無意識という形でコミュニティを発見したとも言えよう。しかし近年の心理療法では、個人から周囲への波及が少なくなっているように思う。こころとコミュニティの新しい関係を問い直すことが必要ではなからうか。

2018年12月

京都大学こころの未来研究センター長 河合俊雄

こころの未来

KOKORO RESEARCH CENTER
KYOTO UNIVERSITY

2019 vol. 20

目次

ごあいさつ	河合俊雄
01 巻頭言 長寿社会のコミュニティ	秋山弘子
〈特集 コミュニティ〉	
02 コミュニティとは何だろうか	広井良典
04 宮坂学氏インタビュー ネット・コミュニティの未来	宮坂 学+広井良典+熊谷誠慈
10 勝部麗子氏インタビュー 無縁社会を超えて	勝部麗子+広井良典+吉川左紀子
論考	
16 「いま・ここ・自分」を超える脳とコミュニティ——世代間衡平問題の解決に高齢層が果たす役割	亀田達也+齋藤美松
20 共感の落とし穴	友野典男
24 鎮守の森とコミュニティ原理	藪田 稔
28 アートとコミュニティ	吉岡 洋
32 交通とコミュニティ——ソーシャル・キャピタルを育む地域公共交通	宇都宮浄人
36 コミュニティと Society 5.0	加藤 猛
研究プロジェクト	
40 研究プロジェクト一覧 (平成29年度)	
41 身体疾患とこころのケアに関する研究	河合俊雄
42 「もの」のカテゴリと選好性の計算機構	小村 豊
43 身体・脳の情報を統合するコグニオミクス	小村 豊
44 こころ学創生:教育プロジェクト	吉川左紀子+内田由紀子
45 発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	田村綾菜+小川詩乃+吉川左紀子
46 対人相互作用に関わる認知・感情機能	吉川左紀子+布井雅人
47 連携MRI研究施設における認知神経科学の教育事業の展開	阿部修士
48 意思決定の認知科学	阿部修士
49 畏怖・畏敬感情の機能に関する心理学・神経科学的研究	内田由紀子+中山真孝
50 環境中の統計情報に対する潜在的認知とその影響	上田祥行
51 福祉と心理の総合化に関する研究	広井良典
52 持続可能な医療・社会保障に関する研究	広井良典
53 鎮守の森とコミュニティづくり	広井良典
54 見えない人々による美術表現に関する研究	吉岡 洋
55 つながり・共生のメカニズムとこころの豊かさ	内田由紀子
56 地域コミュニティにおける社会関係資本——地域内外でのつながり形成過程	内田由紀子+竹村幸祐
57 集団場面における社会的認知——顔知覚による検討	上田祥行
58 期待感とこころの豊かさについての研究	柳澤邦昭
59 文化・歴史的観点からのこころの豊かさ比較研究	河合俊雄
60 子どもの発達障害へのプレイセラピー	河合俊雄
61 組織文化とこころのあり方——日本における企業調査	内田由紀子+中山真孝+竹村幸祐
62 ポスト成長時代の経済・倫理・幸福	広井良典
63 アジアと日本の精神性・幸福感・倫理観	熊谷誠慈
64 超高齢社会における現代日本の医療・保健・福祉にかかる倫理	清家 理
65 ポスト成長時代のこころの問題と変容	畑中千紘
66 甲状腺疾患におけるこころの働きとケア〈研究1〉	長谷川千紘
67 作業療法セラピストと子どもの相互作用	長岡千賀
68 高齢者の認知能力に及ぼす運動スキルの影響とその神経基盤	積山 薫
69 新入社員の不適応予防につながるアセスメント法の開発	野口寿一
70 外来種いけばな——身近な自然を知る試み	伊勢武史
71 2017年度仕事一覧	
80 センターの主な動向 (2017年10月~2018年3月)	
編集後記	

編集後記

コミュニティというテーマは、文・理ということを含め、さまざまな学問領域や社会の諸課題がクロスするテーマであり、特にそれは現在顕著になっていると思う。加えて（やや手前味噌ながら、）こころの未来研究センターはこのテーマに関する1つのメッカであるようにも感じている。（広井良典）

自分が子供だった昭和30～40年代を思い出すと、共同体とかコミュニティというものは鬱陶しくて、抜け出したい気持ちが強かった。今再びコミュニティについて考えるためには、「古き良き」じゃない、新しいコミュニティのイメージが必要だと思う。（吉岡 洋）

自分が学生だったころは、「コミュニティ」と言われても、いまいちピンと来なかったのが正直なところである。社会に出たり、家庭を持つようになって、はじめてそのありがた味を感じることができたように思う。本号はコミュニティの存在意義を多方面から掘り下げる、貴重な特集号である。（阿部修士）

戦後の急速な経済発展の中で、わが国の地域コミュニティは衰退を余儀なくされてきた。しかし近年、コミュニティの意義を再評価しようとする流れが出てきている。本号では、コミュニティを社会的なつながりとしてだけでなく、より広範な視座から学術的分析を提供することができたように思う。（熊谷誠慈）

本誌掲載の2つのインタビューに同席させていただき、あまりに興味深いお話に思わず身を乗り出してお聞きしていました。巻頭言も論考も、新鮮な視点からコミュニティが捉えられています。本誌らしい読み応えのある特集をお楽しみください。（原 章）



京都大学 KOKORO RESEARCH CENTER • KYOTO UNIVERSITY
こころの未来研究センター

